

うづゑのきつま、ほしきは玉さかに君がとぶひの若菜なりけり

〔散木弃詞集卷〕七日卯杖にあたりける日、常陸守經兼がもとより、わかかなにそへてをくりける歌

おいらくの腰ふたへなる身なれども卯杖をつきて若菜をぞ摘略○中

伊勢に侍けるとし、むつきの一日、卯日にあたりければ、みうちに卯杖などたてまつるをみてよめる、

けふぞしるこえくる山のけはしさに年もう杖をつくにやあるらむ

はつうの日よめる

あさましやはつ卯の杖のつくくとおもへば年のつもりぬるかな

卯槌

〔書言字考節用集七器財〕卯槌ツチ江次第系所進卯槌、但俗所謂大子御是矣

〔倭訓栞前編四〕うづち 江次第に糸所進卯槌と見へたり、卯杖と同じきよし源氏の抄にいへり、

枕草紙に五寸ばかりなる卯槌二ツを卯杖のさまかしらつ、みなどして山たちばなひかげなど、うつくしげにかざりてと見えれば、形の異なる成べし、

〔西宮記正月上〕卯杖

糸所式云、卯槌御机組并縫覆料十兩二分每三年一請 卯槌結組料七兩二分每例 同獻三宮一院本

〔江家次第正月〕卯杖事

上古有出御南殿皇太子參上儀、近代不行、春宮被獻卯杖○中次絲所進卯槌如絲所式者其料絲卯

槌御机組并縫覆敷料十兩二分每三年一請結組料七兩二分舟波已上申請納殿藏人取之、結付晝御

帳、懸角柱副立細木爲柱槌末出五尺許可用桃木又四方可削近代丸也、失歟、

〔枕草子二〕うぶやしなひ、うまのはなむけなどのつかひに、ろくなどとらせぬ、はかなきくすだま